

宇井博士「仏教国語語彙」草稿について

所長 高崎直道

昨年六月、本研究所の開所式にあたって、記念講演を賜った東方学院長中村元先生から、開所記念として、先生の恩師で、御本山にも関係深い故宇井伯寿博士の未完の御仕事の原稿を、他の三点とともに寄贈された。（研究所記事参照）

この未完の御仕事とは一種の仏教辞典で、一項目ごとに原稿用紙に記された原稿は、尨大な量に及ぶ。その刊行には種々の準備や調査も必要であり、莫大な費用もかかる長期的な事業となると思われるので、差当って、その編集の由来と、内容の一端の紹介を、本誌を借りて、試みておきたい。（編集の由来などは寄贈者中村先生から伺ったところに基いているが、誤りがあれば筆者の責任である。）

この仏教辞典は正式には「仏教国語語彙」と名づけられており、もと、昭和十年代、宇井博士が当時駒沢大学教授であった国文学者福井久蔵博士から、その集められた原稿を、継承完成することを委託されたものである。従って最初の企画、編集者は福井博士であり、その専門の分野から言っても、日本の文学作品中に用いられている仏教用語の収集と解説を意図されたものである。この基本的性格は宇井博士によって仕事が継承されてからも変わっていない。すなわち、この仏教辞典の特色は第一に、日本の文学作品を読むために必要な仏教語辞典ということができる。

宇井博士が福井博士から依頼を受けたのは、駒沢大学で同じく教鞭をとっておられた友人ということによるのであろう。しかし宇井博士は当時東京大学の印度哲学研究室の主任教授であったから、引受けた仕事の編集に、印度哲学研究室の学生、院生に手伝いを依頼された。中村先生もその依頼を受けた院生のひとりで、多くの項目について清書したり、新しい資料によって補筆することを、命じられるままにされたという。しかし全体の編集については、主として井原徹山氏が宇井先生の下で引受けていた由である。この井原徹山という方は中村先生と同期の昭和十一年卒業で、大学院で研究する傍ら、当時大東出版社で刊行しはじめた研究雑誌『仏教研究』の編集を、京都の長尾雅人博士らと担当したり、また、昭和十九年には『印度教』という大著を出したりした秀才であったが、惜しくも第二次大戦で戦病死された。

宇井博士は、既存の項目について、仏教語としての意味を確定されたほか、出典についても、主に仏教関係の文献から資料を補い、さらに、補遺という形で、新項目を追加された。このようにして、戦前にすでに、この辞典原稿はほぼ整っていた。その量は原項目で約書棚二段分（原稿の厚さ一八〇cm）、補遺はその十分の一ほどである。

しかし、戦前という状況から、その出版は到底考えるべくもなく、箱詰めにはされたまま、あちこち疎開したりして転々したが、幸い戦災も免れ、戦後を迎えた。平和になったと言っても出版状況は好転せず、またその量が尨大である故もあって、長くその出版の引受手が見付からなかった。

宇井先生は、その出版などについて、中村先生に依託して亡くなられたが、中村先生としても如何ともしがたく、今日に至っている。一つには岩波書店から「日本古典文学体系」が刊行されてから、日本の主な文献については、引用をそれに基づいて行うのが利用者にとって便利であるが、福井博士の収集はその点で全面的にチェックし直す必要もあるということで、（これは特に岩波書店が出版を引受けるとしても、その条件となったことだろうと推測される

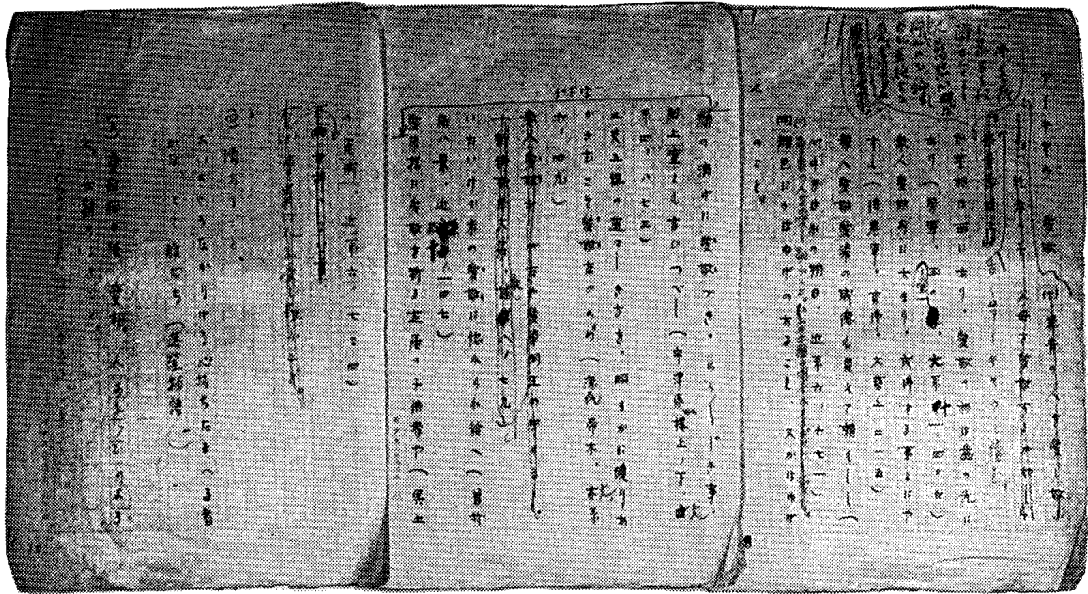
が)、そのためにはまた長い時間が要求されることであろう。

なお、原稿の現物については、何度か保管場所をかえた後、最終的に、宇井博士が生前親しくしておられた総持寺がよからうということ、御本山の宝物館に預っていた。その間、研究に必要な見させてもらえるという事で、何人かの学者はこれを利用した由である。また、岩波書店が先年（一九八九年十二月）『岩波仏教辞典』を刊行するに当って、この原稿を若干参照した。これは同書の序文に明記してある。しかし、寺院よりも大学で預ってこそ、たとい出版が不可能でも、利用度も高くなるであろうとして、すべてを宇井博士ならびに御遺族から委されている中村先生が、今回これを鶴見大学に寄贈されることとなり、本学の図書館にとりあえずお預りした次第である。研究所としては、先ずその原稿の整理・コピー作成等にとりかからなければならぬが、とりあえず、前々からこれを利用したことがある所員の中田直道教授が、その一部について、コピーを試みられたので、それを参照して、若干、内容についてふれておくこととする。

辞典の内容として、どのような事項が挙げられているかを知るために、若干の項目を例示してみよう。原稿のうち、補遺の部分は未整理で順序不同であるが、本項目の方はアイウエオ順に並べられている。その最初からとり上げてみると

ア阿、アイ愛、アイガ愛河、アイカイ愛海、アイキヤウ愛敬…

の順で並んでいる。そこで、いま、内容的に委しく、また興味もある「愛敬」の一部を、次に掲げておく。



アイキヤウ 愛敬

(一) 仏、菩薩が衆生を救済せんとする大慈悲心現はれて、何れにも偏しない至純な愛。

古くはアイギヤウと読む。

弘誓相は面にあり、愛敬の相は齒の光にあり（榮華、玉の臺、

文系十一ノ四〇六）

衆人愛敬身にあまり、成仏することよにやすし（佛鬼軍、東佛、

文芸上ノ二一五）

衆人愛敬愛染の威徳も見えて頼もしし（心中刃は水の朔日、近

系六ノ六七二）

(二) 尊貴の人を愛し敬ふこと。

(三) 顔色にかはゆげのあること、又かはゆげのこと。

顔の清げに愛敬づき、らうくじきこと、殿上童ともいひつべ

し（宇津保楼上ノ下、文系四ノ八七三）

三史五経の直々しき方を、明らかに暁りあかさむこそ愛敬なか

らめ（源氏帚木、文系六ノ四九）

いたいけ小者の愛敬に惚れられ給へ（曾我扇八景、近松、十ノ

一四七）

愛染様に愛敬を祈る芝居の子供衆や（冥土の飛脚、近系六ノ七三四）

(四)情あること

あいぎやうなかりける心持ちたまへる者かな、とて腹だち（落窪物語）

(五)愛敬相の略。愛相。人あしらひのよきこと。世辞のよきこと。

皆これ藝の女人愛敬の所以なり（関東名残の袂五、近系四ノ六三八）

この項のうち、(一)の定義は宇井博士による改訂。(四)、(五)は補い、最後の「皆これ」云々を含めて、文藝作品からの引用はすべて、福井博士の旧稿によるものと見える。

補遺も形式は同じで、形の上では原項目と変わらないようである。一例をあげると、

ゲンギモング 玄義文句

天台大師の法華玄義と法華文句との畧併称で、これ天台三大部の二であるが、それをむつかしい佛書の代表として挙げたのであるから、一般にいへば佛書といふに當る。

此に馴るれば彼處に行き、或時は飢ゑに疲れ、玄義文句に眼を曝し（八百屋お七、近代文系八一―一三）

中村元先生は『仏教語大辞典』を苦心の末刊行された（東京書籍、昭和五〇年）が、その中に出典として挙げられ

たのは仏典ないし仏典に対する日本人の注釈類（その解釈例）であって、文芸作品には及んでいない。この度お伺いしたところでは、宇井先生のこの『仏教辞典』の原稿があるので、その種の出典を渉るのは遠慮されたとのことであった。『仏教語大辞典』の出版された当時、日本の文献における用例もあればよかったとの利用者の声を聞いたものである。その意味でも、この仏教辞典が刊行されれば、極めて有益であると思われる。ただ、資料の補充など、完璧を期そうと思ったら、新しく辞典を編集するのと同じ手間が要ることになるであろう。